作業員が死亡しているのに対策は「基本動作の徹底」か！

作業員触車死亡事故に関する業務委員会開催！

9月19日、本部は、申4号（東海道線における作業員触車死亡事故に関する申し入れ）に関して業務委員会を開催しました。

会社は原因について本人死亡のため現時点で不明としつつ、対策については「触車事故防止の基本である線路立ち入り時の確実な左右確認を再徹底した」とだけ回答しました。

J R 東海労は、列車接近を作業員に知らせた場合に、その伝達が双方に確実に確認できる方法の確立を強く求めました。会社の回答と主なやり取りは以下の通りです。

1. この触車死亡事故が発生した当時の作業状況を詳細に明らかにすること。

【回答】

当日は、線路閉鎖工事による東海道線三島から沼津間、124 k 005mから124 k 640mにおける下り線のロングレール交換と同区間に介在する3箇所踏切補修工事を行う予定であったが、J R 東日本管内で発生した旅客トラブルによる支障事故の影響によるダイヤの乱れにより、線閉着手の時刻が遅れる見込みとなったためロングレール交換を中止し踏切補修のみ行う予定であった。触車が発生した箱根裏街道踏切では、踏切補修工事のため道床突き固め作業が行われており、本人は道床整理作業の担当であった。

2. この触車死亡事故の原因を明らかにすること。

【回答】

原因は調査中だが本人死亡のため原因は現時点で不明である。

3. この触車事故で死亡した作業員の所属請負会社と経験年数を明らかにすること。

【回答】

双葉鉄道工業（株）下請け会社の東海軌道（株）の社員で経験0.7ヶ月だった。

4. 請負会社の作業員に対する会社の安全教育について明らかにすること。

【回答】

請負会社において工事関係従事員触車事故防止標準仕方書内容を含め必要な教育を

行っている。

5. この触車死亡事故から、J R 東海として取った触車事故対策を明らかにすること。

【回答】

触車事故防止の基本である線路立ち入り時の確実な左右確認を徹底した

安全に対する教育を徹底すること！

組合：今回の事故は、会社安全対策及び関連会社に対する安全対策・指導の問題が現象した事故と考える。下請会社への教育はどのように行っているのか。

会社：あらゆる機会を捉えて教育を行っている。

組合：あらゆる機会とは具体的には何か。

会社：あらゆる階層にそれぞれ会議をもって教育している。講習や事件事例検討など行っている。

組合：教育時間の決めはあるのか。

会社：決めていないと思う。

組合：「工事関係従事員触車事故防止標準仕方書」に従ってしっかり教育を受けていたということか。

会社：そういう認識である。

組合：下請会社の安全教育に会社は立ち会っているのか。

会社：必ずしも立ち会っていない。

組合：下請会社に「仕方書」に従って安全教育をせよ、ということであるが、具体的にどう教育しているか把握しているのか。

会社：周知徹底していると聞いている。

組合：実際に触車死亡事故が発生した。今までの教育の捉え返しが必要だ。

会社：当該作業員に必要な教育をしたということは確認している。

組合：具体的な教育のやり方は確認していないのか。

会社：確認したかは今は分からない。

上り線に入った理由はわからない！

組合：事故発生時の当該作業員の作業状況を詳細に明らかにすること。

会社：作業は下り線を線路閉鎖して踏切下の道床の突き固めであった。当該作業員は作業箇所にて採石を運搬してしていた。

組合：当該作業員はなぜ線路閉鎖していない上り線に入ったのか。

会社：採石は作業開始前に下り線側に移動していた。上り線に入る必要はなかった。理由はないと思われる。

組合：採石は作業開始前に下り線側に移動していたという回答を確認する。

列車の接近を双方が確認する方法を確立すること！

組合：列車見張りの状況はどうであったのか

会社：事故現場（箱根裏街道踏切）は124K140M地点、中継見張り員が124K940Mにいた。そこから無線で作業現場の見張り員に列車接近を知らせ、現場の見張り員は作業員に笛と声で列車接近を知らせる。当該作業では見張り員は8人、他に軌道工事管理者などが居合わせた。

組合：可搬式タイタンパを使っていたと聞くが列車接近の合図に気付かなかったのではないのか。

会社：踏切警報機も作動していたので、気付かなかったということはない。

組合：列車が接近したら、作業員はどうするのか。

会社：その場に留まる。機械は動いているが作業はしていない状態である。

組合：軌道工事管理者が上り線の列車通過に支障がないことを確認したあと、当該作業員が上り線に入り触車したということか。

会社：そうである。列車接近の合図が来て、当該作業員も留まったことが確認されている

組合：列車の接近を承知していて、そこに入っていき者はいない。列車接近の合図に気付いていなかったと考えるのが妥当だ。

会社：本人が死亡しているのでなんとも分からない。

組合：会社は対策について「触車事故防止の基本である線路立ち入り時の確実な左右確認を再徹底した」というが不十分である。作業員が列車接近の自覚を表明する対策を取るべきである。例えば、列車通過まで腕を上げて合図を見張り員に示すなどの動作を行うなどである。

在来線列車見張り員支援システムの使用は不明！

組合：会社は在来線列車見張り員支援システムを導入し、平成21年4月運用開始したと聞いているが、当該作業現場では使用されていたのか。

会社：使用していたかどうかはこの場ではわからない。

組合：説明員がそんなことも把握せずにこの場に出ているのか。

会社：下請会社ではまだ運用していないし、この場で使っていたかわからない。ただ、支援システムがなくても、列車の遅れは現場に伝わっていた。

組合：そのようなことは聞いていない。使用されていたのかどうかを聞いたのである。

会社：今はわからまい。

原因を説明するか、しないかはその都度判断する！

組合：原因は調査中だが本人死亡のため原因は現時点で不明であるとの回答だが、わかれば組合に説明するのか。

会社：それはわからない。その都度判断する。

組合：原因がわかり次第説明をすること。

以上